

協調自律学習の質保証の方法の分析と考察Ⅱ

Analysis and Discussion on a Quality Assurance for Collaborative and Autonomous Learning. II

○ 望月 紫帆¹⁾

Shiho MOCHIZUKI

^{1) 2)} 特定非営利活動法人 学習開発研究所

NPO-Institute for Learning Development

西之園 晴夫²⁾

Haruo NISHINOSONO

宮田 仁³⁾

Hitoshi MIYATA

³⁾ 滋賀大学

Shiga University

要約 佛教大学の教職科目「教育方法学」の授業は、チーム学習と個人学習とを統合した協調自律学習による知識創造をねらいとしている。質保証という視点から学習者自らによる成果の査定が行われているが、適切な査定のために必要な情報の読み取り方は学習集団によって差があり、効果的な情報の再確認を要することがわかった。本報告では、2006年度の研究に引き続き、多様な学習者による教育方法の協同開発における評価活動のあり方を検討している。

キーワード チーム学習 質保証 査定 協調自律学習

1. 問題の所在

変動社会においては、諸問題に柔軟に対応できる能力が求められる。佛教大学の教職必修科目「教育方法学」では、協調自律学習の枠組みを用いることで、組織単位での問題解決や知識創造を経て個人が自律して学ぶ力の習得を目指している。

協調自律学習は、目指す学習成果を自身で設定し、形成的なアセスメントを通じて課題点を見出しながら学習方法を調整し、最終的に学習成果を学習者自身で適切に評価できることを目指している。本研究では学習者が行う点検を査定と呼び、その結果からレベルを決定することを評価と呼んでいる。

自律的な学習の調整のためのプロセスには、学習者それぞれの学習を実現するために必要であるさまざまな情報を自ら収集し、解釈し、活かすことのできる能力が求められる。しかしながら、その能力の準備状況は学生によってまちまちである。

2. 研究目的と方法

筆者らはこれまでに、学生が学ぶプロセスで相互に協調しながら自律的に学ぶために必要な能力を育成する授業を設計し実践した(望月ほか, 2006)。これにより、目指す成果に到達する学生の割合は増加の傾向にある。しかし、最終成果を見る限りでは、自己査定基準の理解が不徹底なためか、査定ミスをする学生が散見される。

本稿では、最終成績の集計表を用いて、学習者がレポートを査定するプロセスを吟味して目標の成果

のレベルに到達するために必要な情報の取得状況を分析し、その結果から学習目標の達成を支援する方法を開発することを目的としている。

3. 研究対象

佛教大学の教職科目「教育方法学」は、クラスⅠを西之園が、クラスⅡを宮田が担当しており、望月がTAを担当している。学生はチームに分かれて、チーム学習で得た知見を利用して最終レポート(A4で10枚以上)を個人でまとめる。最終レポートのレベルは、執筆者による自己評価の後にチーム内で査定された結果が申告され、最終的に授業者が妥当性を確認して決められる。基準は表1の通りである。

表1 レポートレベルの査定基準の一部

基準	A・自分で探した文献を2冊以上使用して執筆 レポートの実名公開を承諾してアブストラクトをまとめた場合さらに+5点 B・教科書と配布資料を使う C・とりあえず提出する
配点	A(20点),B(10点),C(0点)
調整点	各レベルで優+5点, 劣-5点(Cは[劣]がない)
調整観点	着想, 構成, 文章, 資料, レイアウト

今回整理したのは、上記の条件が提示された2006年度後期, 2007年度前期・後期, 2008年度前期のレベルA以上を目指した学生の成果である。レベルAは達成条件が多く課されており、アブストラクトを書いて実名での公開を承諾すれば特別加点の希望

を申請することもできる。それらがクリアできていない場合は妥当性がないものとして特別な加点をしない、あるいはレベル B として再査定される。

4. 結果と考察

これまでの分析結果(望月ほか, 2006)によると、達成条件が多く課せられたレベルのレポートでは執筆した学生による査定の判断ミスが多く見られた。また設定された条件の適切さや、他人と協力しながら適切に質保証することに対する理解度や、授業者からみた学生の努力や学生自身が自負する努力と査定結果の関係に注目して考察した。この分析では、判断ミスをした個人がどのようなことを考えて査定するのかというところに着目した。

本稿では、成果物を査定する集団に注目し、その集団にどのような特徴がみられるのかを整理した。その結果、つぎの 2 点が明らかになった。

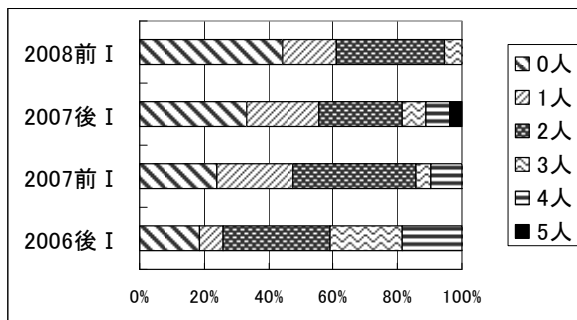


図 1 クラス I の各セメスターにおける査定ミスメンバー数ごとのチーム数の割合

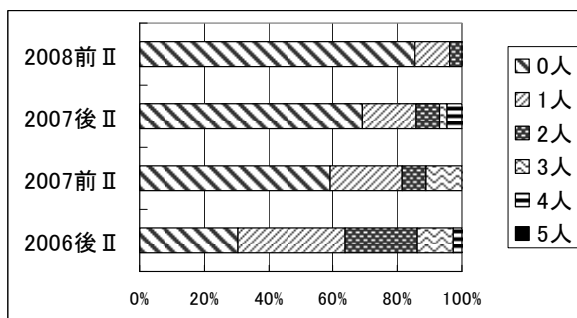


図 2 クラス II の各セメスターにおける査定ミスメンバー数ごとのチーム数の割合

(1) クラスでの情報の提示による違い

ほとんどのセメスターにおいてはクラス I とクラス II で査定ミスをしたチームの割合に差が見られた。クラス I の授業者は情報が書かれたガイドブックから読み取るように指示するのみにとどめ、クラス II

では授業者が数分間だけ注意すべき情報がどのようなことで、それがガイドブックのどこに示されているのかの情報源を再確認した。その結果、査定ミスしやすいチーム数の割合は、クラス II ではクラス I に比べて大幅に少なくなった。

(2) チームによる違い

レベル A 以上で自己査定したが、査定ミスにより B にレベルダウンした学生を整理した結果、同じチーム内で複数のメンバーが査定ミスをしている場合が多いことが明らかになった。各チームの裁量が現れやすいクラス I では、どのセメスターでもチーム内で 2 名以上のメンバーが査定ミスをしているチーム数の割合は全体の 4 割以上を占めていた。これは、レポートの評価視点を一覧表にした評価シートを用いてチーム内で相互評価を行うにあたって、チームによって与えられた情報の読み取り方や確認の厳密さが異なることを意味している。

5. 結論

成果を自分で査定するに当たって必要最低限の情報を正確に読み取る力や、獲得した情報を活用して成果を確認する厳密さは学習集団によって差がある。それを補うものとして重要な情報源を全員で再確認することが自己査定のミスの発生率を抑えている可能性が高いことがわかった。

しかしながら、授業者による情報提供はタイミングを誤れば学習者の議論を妨げることがある。そこで、それぞれのチームのペースで確認できるようにする必要がある。さらに、学生の自己査定の妥当性をより高めるためには、学習集団のさまざまな判断力を尊重しながら情報の確認や成果の査定を重層的に行う方法が考えられる。

6. 今後の課題

学習成果を相互に査定する時間を諸事情により欠席する学生もいる。このような学生は自分の判断力でのみ査定するため、ミスする例も少なくない。こうした学生が他の学生の協力を得ながら適切な質保証を行うための方略についても今後の課題である。

参考・引用文献

望月紫帆、西之園晴夫、宮田仁(2006)、協調自律学習の質保証の方法の分析と考察、日本教育実践学会全国大会 2006 年 11 月 11 日-12 日 鳴門教育大学 pp.83-84